筒井会長　中部経済新聞にインタビュー掲載

中部経済新聞　2018年（平成30年）4月2日 月曜日 （日刊）

6面掲載記事

世界で使われる日本発の医療機器を

メディカル・デバイス産業振興協議会　筒井宣政理事・幹事長に聞く

来春、名古屋で日本医学会総会

メディカルメッセも開催

（1面から続く）

―協議会の活動内容について。

「まず、『医療はどういうものか』ということで、大学などから先生を招いて勉強会をやってきた。そして病院の見学会。実際に病院を見て、そのうえで先生に来ていただき、病院サイドのニーズを我々に投げてもらう。また視察団を組んで海外で開かれた医療機器の展示会にも調査に行った」

―大学とも連携を取っています。

「名古屋大学など13施設が『中部先端医療開発円環コンソーシアム』を組織し、ここからヒントをいただいている。我々がいくら良いものを作ったつもりでも、病院の先生方が本当に欲しいものでないと医療機器は絶対に売れない。開発した製品を、これらの大学病院などで使ってもらえるようになれば、普及に弾みがつく」

―具体的な成果は。

「今まで取り組んでいる製品は、分類でいえばクラスⅠ（一般医療機器）かクラスⅡ（管理医療機器）ばかり。クラスⅢやクラスⅣ（高度管理医療機器）はまだまだ。やろうとはしているのだが、『これ』というのはできていない」

「医療機器は、医学・動物学・生物学・電気や流体力学など、多くの産業が関わってくる。すそ野が広い」と話す筒井幹事長

「手術支援ロボットとして世界中で導入が進んでいる『ダヴィンチ』は米国の製品だが、その部品の8割は日本製。しかもそのうちの6割は中部地区で作られている。中部はモノづくりの基盤がある。必ずこの地域で医療機器ができるはずだ。日本の、いや世界の医療機器の生産基地にしたい」

「医療機器は、医学・動物学・生物学・電気や流体力学など、多くの産業が関わってくる。すそ野が広い。MRJと一緒。いろんな部品が組み合わさっており、地域への波及効果は大きい。そして、やはりモノまねでなく、日本発の、世界で使ってもらえるようなものを作りたい。日本だけではマーケットが小さい。先端的な医療機器だと、日本だけなら100しかいらないものもあるが、世界規模ならばすごいマーケットになる」

―商談展示会にも取り組んでいる。

「『メディカルメッセ』は、医療関係者、大学など研究機関、医療機器メーカー、モノづくり企業が一堂に会し、医療現場のニーズと技術シーズのマッチングにより、新たな医療機器の開発を進めようというもの。2014年に初開催した。来年4月には医学界の大きな大会『日本医学会総会』が名古屋で開かれ、メディカルメッセも同時開催が決まっている。活動を広げていくための大きなチャンスだ」

1面掲載記事

中部を医療機器の生産基地に

医療・介護の新紙面スタート

高齢化社会などを受け、今後の成長が見込まれる医療機器分野。中部地区でも同分野に参入する企業は増えている。そうした企業などの受け皿となり、研究会を重ねて医療機器ビジネスの育成を図っているのが、名古屋商工会議所を中心とする「メディカル・デバイス産業振興協議会」。

同協議会の理事・幹事長を務める筒井宣政氏（東海メディカルプロダクツ会長）＝写真＝は、「モノづくりの基盤がしっかりしている中部地区は、世界の医療機器の生産基地になるポテンシャルがある」として、今後も活動を活発化させたい考えだ。

（インタビューを6面に）

メディカル・デバイス産業振興協議会

筒井宣政幹事長に聞く